

忘れな草

田仲典子

雛鳥^{ひなどり}たちは 空を飛ぶ翼を求めて
春の訪れを待っている
夏には 蒼穹^{そうきゆう}の天を仰ぎながら
ひまわりが お日さまと笑っている

やがて 麦の穂の実る秋は過ぎ
真白に広がる雪の絨毯^{じゅうたん}を 櫛^{そり}が走る頃
調子のよい 勇ましい軍靴の音は
地響きを立てて やってきた

踏みしめられた 黒い土の下に
まことを知る花は
口を閉ざされて
ついに涙も枯れてしまった

胎盤と結ばれた臍^{へそ}の緒を
銃剣で引き裂かれ
母は 泣かぬ子を抱きしめて
子守歌を歌い続ける

滴^{したた}る紅い血を飲み干し
数多^{しうた}の屍^{しかばね}を養分として
豊沃^{ほうよく}に熟した
その大地の上に

いつの日か
空のように蒼い花びらと
優しく黄色い目をつけた
忘れな草が咲くまで